

社会参加に距離をとる若者とどう向き合うか

川中大輔

龍谷大学社会学部講師／シチズンシップ共育企画代表

1. 「距離をとられている」社会参加

「意識高い系」という言葉がある。さまざまな使われ方をしているものだが、若者の間では地域の出来事や社会問題について関心を寄せ、対話する場に数多く参加したり、ボランティア活動やNPO等でのインターネット・シッピングに積極的に取り組んでいたりする若者を揶揄する時に主に使われている。社会的に好ましいと思われる行動をとっているにもかかわらず、なぜ揶揄の対象となるのだろうか。

敢えて揶揄する側に立つて考えてみたい。揶揄する側からすれば、享楽に耽つたりアルバイトでお金

か、承認欲求を充足できるからではないかとの「不純さ」への疑念も時に生じさせることとなる。

仮に揶揄する側がこのように考えるのだとすれば、社会参加する若者は自らに理解しがたい奇妙な存在か、あるいは、私益を得たいという動機を覆い隠す不誠実な存在かとなる。

自分がある

のよう

に「純粹」な利他性

を備えた存在

であると認識

されたくない

がために

「純粹さ」に

対する距離

化)、あるいは、自分が偽

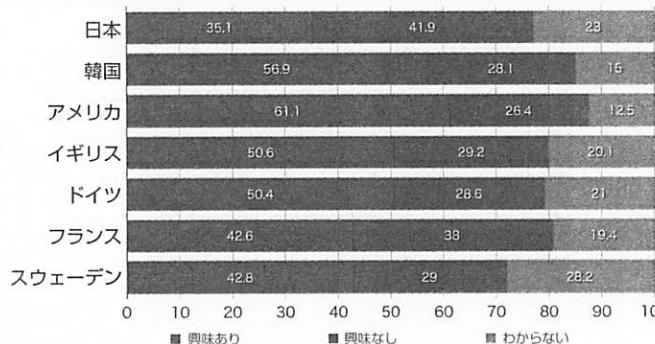


図1 ボランティア活動への興味
(内閣府「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」より)

を稼いだりすることのできる私的な時間を利他的行為と考えられる社会参加に充当していることは、一見すると理解しがたい。そこで、社会参加する若者が語る「思い」に耳を傾けても、多くの場合は、何かしらの社会問題を解決し、世の中を変えていくためという「純粹」な動機が聞こえてくることとなる。そうすると、利他的に動いていくことへの不可解さは解きほぐされず、謎が深まるばかりである。

また、語られる言葉と実際になされる行いとの間の乖離が大きく、利他的な目標達成への真摯さを感じられなければ、社会参加に取り組んでいる理由は就職活動の際のアピールポイントになるからではない

「不純」な存在であると認識されたくないがために「不純さ」に対する距離化)、社会参加する若者から一線を画し、私はそうではないという自己呈示を行うこととなる。そして、参加層も揶揄されるリスクを感知して、自らの行為を語ることを避けるようになり、結果として社会参加をめぐる語りが若者の間で聞かれにくくなる。

実際に揶揄する側に立つ若者が多いわけではない。しかし、多くの若者にとって社会参加は自らが進んで行い得るものとの認識にはなっていない。内閣府「平成二五年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」における「あなたはボランティア活動に興味がありますか?」との質問に対しても「はい」という肯定的回答をした者は35・1%に留まり(図1)、「将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したい」との質問に対しても「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という肯定的回答をした者も35・4%に留まっている(図2)。いずれも比較七カ国でもっとも低い数値となつてい

Stigma

月刊スティグマ

千葉県の人権問題をタイムリーに紹介する月刊総合誌

2019年8月号 No.277

定価500円(送料別)

連載 特集

2018年度、

香取市・酒々井町

人権問題意識調査実施される

部落解放運動の今後のある方についての論点………鎌田行平

法人の名称が変わりました!

一般社団法人
千葉県人権センター

千葉県印旛郡酒々井町本佐倉352

TEL 043-496-4967

FAX 043-496-4572

cjinken@symphony.plala.or.jp

郵便振替 00150-2-143375

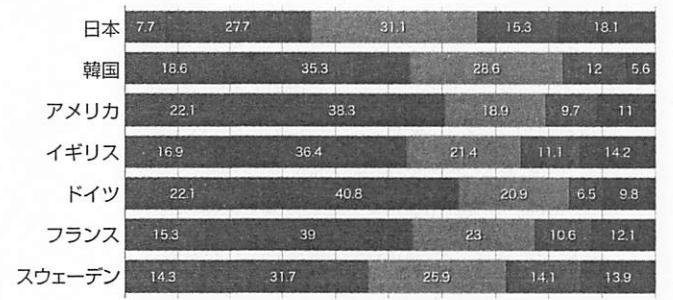


図2 政策決定への参加意欲
(内閣府「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」より)

る。日本において、社会参加は多くの若者から「距離をとられている」と言つて差し支えないだろう。それでは、どのように社会参加への距離感を縮めていくことができるだろうか。

2. 「公と私」の分離から接続へ
社会参加に距離をとっている人々の考えには、公的な活動をする際に私的な思いが混ざることを「公私混同」として望ましくないものと捉える禁欲的前

いて、社会参加は多くの若者から「距離をとられている」と言つて差し支えないだろう。それでは、どのように社会参加への距離感を縮めていくことができるだろうか。

提がみられる。これは「不純さ」に対する距離化のみならず、「純粹さ」に対する距離化にも言える。なぜならば、「純粹さ」に対する距離化は、公的な活動は「純粹」であらねばならないにもかかわらず、私はそのように徹底できないと感じところから生じているからである。このため、非参加層が想定する社会参加は、まち美化活動でのゴミ拾いや災害時等でのガレキ撤去(ひろう)、社会的弱者を支援する募金活動や収集活動(あつめ)、マナー向上やルール遵守のための啓発活動(よびかける)といった私益と縁遠そうなものになりやすい。

しかし、フェミニズム運動で掲げられた「個人的なことは政治的なことである(the private is the

道徳科の「授業革命」

園田 雅春 著

四六判・274頁・定価2800円+税

二〇一八年四月から「特別の教科道徳」が小学校で開始された。政治的な導入を批判しつゝ、人権を基軸に授業を再構築し、「考へ、議論する道徳」をどう実現するかを提起する。解放出版社 ISBN978-4-7592-203

political)」とのスローガンにある通り、「公と私」を分離することではなく接続することから社会参加へと導かれていくことは少なくない。日常生活のなかで直面するさまざまな困りごとは一見すると私的なことのように思われるものであっても、社会的な要因によって惹き起こされたり、解決が困難化させられたりしている可能性があることをこれまでの社会運動は提示してきた。

その意味では、私益と公益は二項対立の関係になるとは限らない。また、社会参加は純粹な利他性のみによって支えられなければならないわけではない。当然ながら、当事者の最善の利益を第一に考え

て活動されることが求められるが、その過程で私を得たり、自己実現を遂げたりしていくことの一切が否定されるものではない。こうした考え方には参加層にとって「当たり前」のように思われるものであるが、非参加層と幅広く共有されているとは言えないだろう。ゆえに、社会参加への距離感を縮めていく初めの一歩は、「公私混同」を潔癖的に退ける考え方を「脱学習(unlearn)」していく機会の提供にある。

具体的に私が若者の社会参加を推進する場においてまず行っていることは、自分が現在／過去の生活を省みて「嫌だ・困っている・ほっとけない」と心

底より感じたことを書き出す実習である。「部活動が活発ではない通信制高校に通つており共通の趣味の友人を見つけられない」「塾のバイトでサービス残業がある」「学校の休み時間に本を読んでいたら『マジメやなあ』と周りに冷やかされて、それ以来、教室で本を読めなくなつた」といったように若者自身が経験したことがあれば、「働いている母の帰宅が夜遅く、いつも疲れ果てている（そのことで自分の相手をしてもらえない寂しい）」「在日コリアンの友人がヘイトスピーチに曝される（そのことに対する自分が何もできずにもどかしい）」といったよう若者の家族や友人などが経験したこととも挙がつてくる。

彼ら／彼女らは、親密な友人に對して、こうした経験を掘り下げて語ることも聞くことも珍しいと言。その理由として「大切な友人」を不ガティブな感情に巻き込んでしまうことを忍びなく思つていたり、伝えたところで何も動かないと考え、結局は自己責任で解決すべき問題だと捉えていたりする」と

新しい社会システムを創造していく市民としての成長 (自信と意欲の回復／力量の形成と社会関係の強化／自覚の涵養)

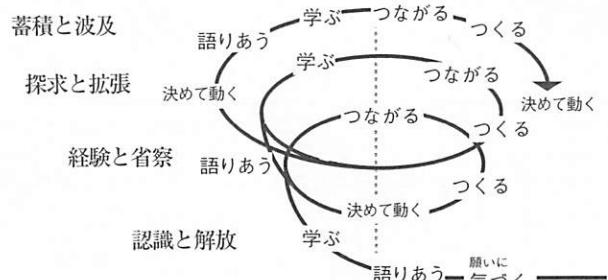


図3 市民のエンパワメントプロセス
(出典：第1回 市民とNGOの「防災」国際フォーラム「神戸宣言」
(1995年12月)を参考に筆者作成)

る結び目が見出された後は、扱う事象についての学びを深めながら、地域における関係者／支援者とながつていくなど、若者が自らの手で社会参加の足

が語られていた。こうしたことも相まって、憤りや悩みは「個人化」される傾向にあり、共感／共鳴から活動が立ち上がる展開に結びつかない状況に陥る(ファーロング&カートメル2009)。

「公と私」が接続されるには、この状況に描さぶりをかけて、私的な経験を集団的経験として認識していく機会を提供することが求められる。そこで、他者の「嫌だ・困っている・ほつとけない」を聴いて感じたことを伝え合うように促した上で、「同じように感じている人は他にいないだろうか」「何が不足しているからそのような経験をすることになるのだろうか」と問い合わせていくこととなる。「生きた生活感情」を言葉に出発点に、耳を傾け合いながら相互浸透を進めたり、社会認識を耕したりしていく過程は、たとえば無着成^{むちやくせいきょう}恭が山形の中学校で取り組んだ生活綴り方運動とも通ずるものであり(無着編'951)、改めて無着らの実践に学ぶことは多い。

このような語り合いを経て、「公と私」を接続す

場を組み立てていけるよう支援することとなる。その上で、若者自身の強みが發揮される形でのプロジェクト活動の企画・実行を励まし、社会参加がもたらす「手応え」を味わう機会へと誘つていく」とが求められる(その実践例として、尼崎市「あまらぶジュニアコース」など)。一連の「語り合う・学ぶ・つながる・決めて動く」を積み重ねていくことで、社会的なコンテクストのなかで自らの生活を捉えつつ、新たな社会を形成していく主体としての自己認識が育まれ、市民としてのエンパワメントが進んでいくこととなる(図3)。

3. 「結び目」がほどけない交わりと伸び

もつとも、「公と私」を接続する結び目が見出されたからといって、社会参加への距離感が縮まつて、実践に直結するとは限らない。その結び目はすぐにはほどけてしまうかもしれない。どのような結び目であれば容易にほどけず、実際の社会参加に至るのだろうか。

一つはその結び目をほどかずに社会参加に踏み込んでいけば、自分も「あの人」のようになれるかもしれないという、憧れの対象への接近可能性が見出される場合である。そこで、ロールモデルとなり得る人々との交わりが持たれることとなる。これは学校教育現場でも数多く採用されているアプローチだろう。

もう一つは、その結び目を軽々しくほどいてしまえば、自らの良心が激しく痛むような場合である。この良心の痛みは、自分自身や自分にとつて大切な人々が不条理な社会的不利を被っている状況と正対するところから生ずるものである。そこで、この世で小さくさせられている人々との交わりが持たれることとなるが、ここで留意すべきは、交わる人々が自分にとつて大切な存在と感じられなければ、その出会いの価値が弱まってしまうということである。感情的なつながりが弱いなかで、他者の苦しみを共に受けもちつづける選択をする人はきわめて限られるからである。それにもかかわらず、単発的に（し

かも短時間で）、困難な状況と格闘している動きを伝えるだけという取り組みは少なくない。結果として、「私はその状況に陥らなくてよかった」との思いを基調に自らが置かれている環境に有り難みを感じるところで終始していることがしばしば見受けられる。そのため、暮らしのなかの喜びや楽しみを共有する時間を先行させた上で、悲しみや苦しみの共有に展開していく流れが求められよう。

また、結び目がほどけるのは、知識の不足や技能の未修得のために、社会参加の現場で語られることや為されることに難解さを感じた時もある。知識や技能は参加を通じて獲得されることも多いが、教育によつて「未知の世界」と向き合う備えを整えることは求められよう。こうした社会参加に求められる市民としての資質や能力、態度を涵養していく学びはシティズンシップ教育（市民性教育）と言われる。シティズンシップ教育は従来の公民教育のように市民としての権利を知識として理解／認識するに留まらない。権利を行使して社会に参加しながら知

識や技能を学習し、市民としてのアイデンティティを形成していくところまでを志向するものである（図4）。

二〇〇二年に制度化したイギリスの取り組みがよく知られているが、日本でもすでに多様な形態でシティズンシップ教育実践が繰り広げられている（日本シティズンシップ教育フォーラム編2011）。その実践をみると、地域参加学習やボランティア学習などとの類似点も多く見出されるだろうが、シティズンシップ教育では政府の責務を市民に肩代わり

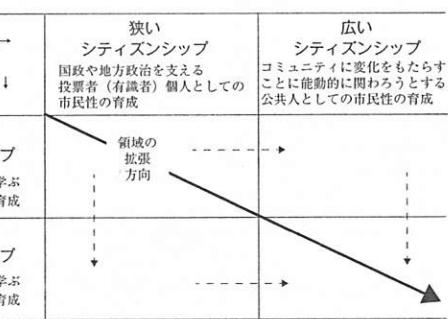


図4 市民性に関する教育の領域拡張
(出所: 水山2010年元に筆者作成)

させるような形での社会参加が推進されないことから、「一八歳選挙権」の実現以降は「主権者教育」との表現で、投票を中心とするフォーマルな政治参加を促す実践が特に広がりを見せてている。また、地域創生の文脈から若者による地域活性化を目指す実践も地方を中心に広がってきてている。重みづけのされ方は地域によって異なるところもあるが、社会参加に対する距離化の問題は学校教育でも主要課題の一つとして扱われるようになってきていると言えよう。この情勢はさまざまな場からの若者への働きかけを可能とすることを示唆しており、地域内での連携／協働の強化を進める必要性が見出せる。

4. 「距離をとること」からみえる社会参加

ここまで社会参加を促すための働きかけについて述べてきたが、この際に非参加層を教化することだ

特集

外国人教育のいま

榎井 緑 責任編集

- 12 高校入学や高卒後の進路に大きな課題 角田 仁
東京の外国人教育の現状と課題
- 21 高校入学後の支援が充実 神奈川の外国人教育の現状と課題 高橋清樹
- 32 高校入試の壁と学齢超過者の公的学び舎の欠如 小島祥美
愛知の外国人教育の現状と課題
- 45 子どものアイデンティティ尊重を基礎に 大阪の外国人教育の現状と課題 榎井 緑
- 55 日本語指導中心の同化施策 福岡県の外国にルーツをもつ子どもに関する施策 奥村美保

- 82 「女性に対する暴力」をめぐる先進諸国の状況 林 陽子
- 91 フジ住宅ヘイトハラスメント裁判の報告と支援のお願い 富田真平
- 100 社会参加に距離をとる若者とどう向き合うか 川中大輔
- 109 同和地区の貧しさについて考える(最終回)
「縮小する同和地区」について考える(その2) 島 和博
- 120 連載 部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造36
合理的な雨乞をした人 宮栗郡神戸村 川元祥一

- 1 グラビア | わたしは7月26日に殺された19人のひとりだ—相模原障害者大虐殺追悼アクション 編集部
- 10 水平線 | 「仲間だったよ」という記憶を残す保育 ト田真一郎
- 66 人権いろいろ | 日韓関係、互いに知恵を絞り合おう 福島みづほ
- 68 メディア時評 そら違うで | 「表現の不自由展」中止、表現の危機的な状況 西村秀樹
- 70 IMADRアップテイト | 気候変動とメキシコの先住民族
- 72 映像フリースペース | タイ国のオタク映画は、どうやら日本を源流としているらしい
—タイ国映画「ホームステイ／ボクと僕の100日間」白井佳夫
- 74 東京音楽通信 | 怒れる民衆の歌—香港デモでなにがうたわれているか 藤田 正
- 76 子ども・教育・自由ノート | 真夏の「死のロード」に思う 園田雅春
- 78 ヘイト・スピーチを受けない権利 | スウェーデンにおける反差別法・政策(2) 前田 朗
- 128 編集後記

(エリヤス1991、奥村2017)。

そのように考えれば、非参加層への教化ではなく非参加層による教化に、社会参加の「新たなる動き」の創出可能性を見出せる。ゆえに、まずは非参加層が社会参加を拒絶するところから観察するところへと距離を詰めてもらえるよう、謙虚な姿勢で「私たちの活動をどのように捉えていますか」と問い合わせ、そこから対話を創り出していく粘り強い営為が参加層には求められるのではなかろうか。

この際、非参加層の無理解や誤解を指摘して説論するのではなく、自他がそのように考えるに至った背景／過程を開示し合っていく流れをつくる」とに

けが目指されるべきではない。参加層は自らが置かれた状況や関与している実践に没入して、固定観念に囚われていたり、周囲を冷静に見渡せていないたりする。むしろ、距離をとっている非参加層のほうが引いた目線から捉えて、何が問題解決を困難にしており、どのような動きが欠けているのかといった全体状況を客観的に認識でき得るとも考えられる

参考文献

- アンディ・ファーロング、フレッド・カートメル、2009 「若者と社会変容—リスク社会を生きる」 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳、大月書店
- 奥村隆、2017 「社会はどこにあるか—根源性の社会学」 ミネルヴァ書房
- 日本シティズンシップ教育フォーラム編／唐木清志・岡田泰孝・杉浦真理・川中大輔監修、2015 「シティズンシップ教育で創る学校の未来」 東洋館出版社
- ノルベルト・エリヤス、1992 「参加と距離化—知識社会学論考」 波田節夫・道旗泰三訳、法政大学出版局
- 水山光春、2010 「日本におけるシティズンシップ教育実践の動向と課題」 『教育実践研究紀要』 第10号、pp.23-33、京都教育大学附属教育実践総合センター
- 無着成恭編、1951 「山びこ学校—山形県山元村中学校生徒の生活記録【増補版】」 青銅社

かわなかだいすけ

留意しなければならないだろう。そして、対話を通じて得られた信頼関係を基盤に、協働へと結びついでいく参加の回路を共に設計／試行していくことが求められているのではないだろうか。冒頭に確認した通り、「これまで」のやり方では、限られた人々しか社会参加へと結びつけられなかつたのだから。